

川 端 康 成 の 短 編 と サ リ ン ジ ャ ー の 短 編 の 死 の 表 象 の 差 異
— 「 恐 し い 愛 」 、 「 百 合 」 と 「 バ ナ ナ フ ィ ッ シ ュ に 最 良 の 日 」 —

はじめに

成功を収めながらも、その成功の大きさ故に新たな人生の指針を失ってしまう、いわゆる「燃え尽き症候群」は作家にも当てはめられる。日本文学界の中心人物としてかなり多くの作品を生み出し、ノーベル文学賞を受賞するという栄誉を手にした川端康成(1899-1972)は、1972年に仕事部屋でガス自殺をする、という終わり方をしている。1968年のノーベル賞受賞のすぐ後のこの自殺は、大きな成功故の虚無感の結果と考えても間違いないだろう。そして同じように作家として大成功を収めながらも、度重なる結婚と離婚、隠遁生活、裁判沙汰などのトラブルで晩年には厭世的傾向を持つようになったアメリカ人作家がJ・D・サリンジャー(J. D. Salinger, 1919-2010)である。成功の後の厭世的傾向という共通性が二人の作家に見えてくる。そしてこの二人の作家には死をテーマとした作品という共通性も存在する。おそらくは互いに何の影響も受けていない二人の作家の作品を死のテーマという共通性のもとに、本質を比べてみる事でここでは論を展開する。川端の作品は『掌の小説』(1971)という短編集の中から「恐しい愛」と「百合」¹を取り上げ、サリンジャーについては同じように短編「バナナフィッシュに最良の日」(“A Perfect Day for Bananafish”, 1949)²を取り上げ、二人の作家の作品中に見られる死の表象の本質を比べてみる。

川端と死の関連性を述べている批評家に小原早苗がいるが、彼女は「康成の文学が生命に対して強い嗜欲を示すにもかかわらず、結局は死への下向の姿を見せている」(93)と述べる一方、川端の美の追求にも死に関連するような悲哀の態度が見られると以下のように示している。

康成には、純粹な美の追求のためには現実や生活を拒絶し、たとえそれが背徳行為であろうとも辞さないといった態度が

見えるのであるが、そうした美の追求者は、その異常な感受性のために現実では孤独を強いられねばならず、しかもそのあくなき美の追求も、結局は精神の虚しい焦燥—徒労—である、といった認識に到達しなければならない……(93)

川端作品にみられる死の表象の重要性に関連付けられる意見ではないだろうか。

そしてサリンジャーの厭世的傾向の要因には、ユダヤ系であるというアメリカ社会に同化する際の苦労等もあろうが、ここでは戦争参加の影響を考えてみたい。1942年に合衆国陸軍に入隊し、ノルマンディー上陸作戦にも参加したサリンジャーであるが、戦争終了後に精神を病み、入院するという経験をしている。「バナナフィッシュに最良の日」の主人公は戦争の傷跡が完全に癒えないまま退院して自殺する、という筋書きであるが、この内容とサリンジャーを結び付けることは見当違いではないだろう³。イアン・ミラー(Ian Miller)は1939年から1945年の戦争状態の人間の体と精神について以下のように述べている。

Medical professionals are often obliged to engage with unforeseen problems during times of conflict. These typically emerge and develop unpredictably, giving rise to spates of internal biological disorders that may affect specific body areas or induce problematic forms of psychological behavior . . .

戦争の時には医学の専門家は、しばしば見えない問題に取り組まなければならない。これらの見えない問題は象徴的に表れ、予見できないうちに発達していく。そして体内の生物学的な異常を大きく引き起こし、体の特定の部分に影響を及ぼしたり、あるいは精神行動の問題を誘発する……

戦争参加の影響はミラーが述べているように間違いなく存在し、サリンジャーにもそれが見られると考えるのは、ごく当たり前の事である。サリンジャーにとっても戦争に関連付けられる死は、重要なテーマである。

川端の短編「恐しい愛」、「百合」、サリンジャーの短編「バナナフィッシュに最良の日」に見みられる死の表象に違いはあるのだろうか。あるいは共通項はあるのだろうか。比較文学としてそれをここでは検討したい。

1. 「恐しい愛」と「百合」に描かれる愛

川端作品の死についての態度を考察するのに「恐しい愛」と「百合」の短編を扱うが、この両作品には歪んだ愛という共通項が見られる。愛とは正反対とも考えられるマイナスの働きが見られるのである。川端作品を解釈するのに、しばしば「仏界」と「魔界」という正反対の言葉が並置されるが、この正反対の概念を説明した三田英彬の「抒情歌」の解釈を引用してみる。

いわば輪廻転生から解脱して涅槃に入れと釈迦は説いているものの、それに背いて輪廻転生こそ豊かな夢を織り込んだおとぎばなしと肯定している。そして現世社会を仕切る倫理としての因果応報は、抒情詩の汚れとして排撃される。輪廻転生を美しいおとぎばなしとし、反面この世の因果応報を否定している面で明快に仏教に背いていることは言うまでもない。
(74)

仏界という正当性に対して、反対の魔界という逸脱、異常の考えを見て取れるだろう。この正当性に対する逸脱と異常の世界観は川端の「恐しい愛」と「百合」にも敷衍できる考え方である。

必ずしも宗教について考察しなくても、正統性とは反対の逸脱と異常の観点で考察できる。「抒情詩」の上の解釈が他作品の正当性と逸脱に敷衍しても問題ない、と考えられる根拠には「『抒情詩』は昭和七年、三十三歳のときに発表されているが、これは川端文学全体のメルクマール（標識）にあたる作品であった」（73）という三田の言葉が適切ではないだろうか。

「恐しい愛」に描かれる愛は逸脱と異常な愛である。死んだ妻を愛しすぎるゆえに、他の女を遠ざける主人公の男は、「家にも女を使わないことにした。炊事や掃除も男にさせた。これは妻以外の女を憎んだためではなかった。女という女が皆死んだ妻に見えるからであった」（179）と愛とは反対の満たされない心の内を示しており、「どの女も妻と同じように魚の臭いがする」（179）という身体反応の異常すら経験している⁴。妻への愛が逆に愛とは反対の満たされない心情を引き起こし、通常とは違う逸脱の経験を誘発している。そして実の娘に対しても「彼女がこの世のどの女よりも死んだ妻に似ていることは勿論だった」（179）とし、避けたくても一緒に住んでいるため避けられないという不具合を示している。現在生きている娘に対しても死んだ妻という死を重ね、喪失の考えを持っている。他の女を避け、実の娘を避けたくても避けられずにいる、という死んだ妻への愛が引き起こすものは、喪失の概念である。愛とは反対の概念であるのがわかる。

「百合」の場合はどうであろう。主人公の愛の対象として小学校の友達、女学校の友達、そして夫という三者が示されている。小学校の友達については、友達が小さい鉛筆を使って兄さんの古カバンを使っているのが可愛想という理由で、自分も鋸で鉛筆を小さくし、男子用のカバンを泣いて買ってもらおうという同化の行動をとる。愛を注ぐ自分の友達の状況が、自分自身の状況を望ましくない方向へ向かわせているのは明らかである。この事は女学校の友達が霜焼けで紅くなることを美しいと考え、「洗面器の冷たい水に長いこと手を漬けていたり、耳を水に濡らしたまま朝風に

吹かれて学校へ行ったりした」(187)という行動とも重なる。自分自身を貶める喪失を愛が生んでしまっている。

学校を出て夫を愛しすぎるゆえに、「髪を切り、強度の近視眼鏡を掛け、髭を生やし、マドロスパイプを銜え、夫を『おい。』と呼び、活潑に歩いて陸軍に志願しようとした」(187)行動は、夫を愛する女という自分自身の女性性が、愛ゆえに意味を変えてしまっている例である。愛ゆえに男を愛する女の特性を失っている喪失を表している。「百合」においても愛は喪失という結果を生んでいる。

満たされた状態が愛の正当性であるなら、愛による喪失の状態は、愛とは反対の逸脱である。愛によりこの喪失が生まれるというのは紛れもなく逸脱であり、異常である。先に説明した川端文学に見られる仏界と魔界の正当性と逸脱、異常の表象は、この「恐しい愛」と「百合」に見られる愛についても当てはめられる、と言える。

愛による喪失の状態はさらにどのような変化を起こすのだろうか。「恐しい愛」の主人公は娘の部屋に電燈がついたのを確認し、そっと部屋を覗くという行動をとる。そこで彼が見たものは、娘が泣いている姿であり、また爪を切る、という行為である。この泣くという行為と爪を切る行為は、まさに生の証であり、主人公が考える死んだ妻と娘を同じように考える死の状態とは対極に位置する。また娘が床の上で白い布をかき集めて部屋を出ていった後に、水道の水音を主人公が聞くという様子から推測できるのは、娘が初潮の証を水道で落としている事である。水で濡れた布を火鉢で乾かし、ぼんやりとある種の哀しみと恥ずかしさにより、涙を流す。この娘の成長の証である初潮の経験も、生きているという、死んだ妻の属性とは対極をなすものとなっている。

娘の部屋をのぞき見した主人公は、娘に短刀で喉を寝ている間に狙われる事になる。「自分が妻を極端に愛した、一人の女を愛しすぎた天罰だとあきらめて、静かに目を閉じていた。母親の敵を

娘が討つのだと感じながら刃を待っていた」(180)とあるように、主人公は死を迎える事になる。死んだ妻と同じように考えていた娘が、生の証を見せ、それをのぞくことによって、自分は死を迎える。自分は死んだ妻と共に死という状況で重なる事になるが、娘は生という状態にある。いわば死と生という分断が起こる。娘を死んだ妻と一緒に考える死の概念は、娘が示す部屋の中での生の証をのぞき見した結果、自分が死に娘は残るというように、否定される。父親と娘の死と生の分断をもたらすと同時に、死んだ妻と一緒に考えられる娘像も、主人公が命を失う事によって否定される。この意味でも死から生への意味変化であり、死と生の分断を生じる。妻への愛は結局、死と生の分断をもたらすと言える。野口祐子は『美しさと哀しみと』の主人公けい子という若い女性について「彼女は過去に対する復讐のために、未来に向かって行動を起こす」(50)と説明しているが、別の作品であるこの「恐しい愛」中の娘も死から生への意味変化をもたらす行動の本質は、主人公の死んだ妻と重ねられる事に対しての否定であり、過去の否定である。過去を否定し、生の証を示すという事は、未来へとつながる事であり、けい子に対してのこの考え方と重なってくる。

「百合」の場合はどうか。夫と同じ格好と行動をとる事を許されない百合子はやがて「彼女の愛は手足を縛られた不自由さで、芽を切りとられたようにだんだん衰えて行った」(188)とあるように、愛の対象からだんだん精神的に離れていくようになる。ついには「私は愛する神様と同じ姿になり、同じことをしたいのでございます。」(188)と神と自分を同じに考えるという、冒涇と尊大さを抱くようになる。百合子の愛は、愛する対象から離れて、自分自身への愛と変化したと言える。神と同じことをしたい、というのは人間性の否定であり、自らを神となぞらえるという自己への尊大な愛が元になっている。小学校の時の友達、梅子を可哀そうと思う愛、女学校の時の友達、松子を美しいと思う愛、そして夫を愛する愛は、どれも他者へ注ぐ愛である。神と同じになる

事を望むという自己を愛する事によって、愛する対象としての他者からは分断してしまったのである⁵。そして神と同じになる事を望んだ百合子は、神により次のような結末を作品の最後で迎える。

神様の御声が爽やかに響き渡って来た。

「汝百合の花となるべし。百合の花の如く何ものも愛するなかれ。百合の花の如く総てのものを愛すべし。」

「はい。」と素直に答えて、百合子は一輪の百合の花になった。
(188)

百合子が手にすることは、全てを愛さず、全てを愛するという矛盾した愛であり、愛の否定と同じことである。愛を注ぐ対象と自分は完全に分断し、自身も人間ではなくなるという人間性の否定である。百合子の示す歪んだ愛の結末は、愛そのものの否定となり、人間性の否定であり、愛を注ぐ対象からの分断、そして自身の人間社会からの分断である。愛は他者にそそぐものから意味を変化させ、分断を意味するようになる。

「恐しい愛」も「百合」もそこで描かれる愛は意味を変化させ、喪失の状態からやがて分断の意味を持つようになるのが分かっただろう。両作品も死んだ妻と娘を一致させる事、そして愛する者と自分を一致させるという、極度の一致の罪が生んだ結末であるのは、言うまでもない。

2. 「バナナフィッシュに最良の日」の交流の不完全性

「バナナフィッシュに最良の日」は退役軍人であるシーモア・グラス(Seymour Glass)とその結婚した相手ミュリエル(Muriel)の旅行中の出来事についての物語である。主人公シーモアは戦争による心の傷から回復しておらず、精神に問題を抱えている男。

この物語ではシビル (Sybil) という 10 歳の少女が重要な登場人物として現れるが、物語のテーマはこの少女と主人公の交流にある。

主人公に関する交流の困難さは、彼の名前シーモア・グラス、つまり “see more glass” という「鏡を見る」行為の暗示に既に示されている。他者に対して自分の存在が開かれているのではなく、自分自身の姿を見るという自己の存在に完結してしまっている、という暗示である。他者との関連性により自己が確立するのではなく、自分の存在しか見えない、という交流の困難さが表されている。

作品冒頭から主人公の交流の困難さを暗示するものが点在している。主人公の妻ミュリエルは母親と電話がつながるまで、2 時間半待たされるという経験をしている。電話という通常ならば即座に交流のできる道具が、2 時間半という時間を要し、交流の困難さは作品の冒頭で既に表現されている。やっとながった電話について娘ミュリエルと母親の温度差を表す場面をここで引用してみる。

‘ Muriel? Is that you? ’

The girl turned the receiver slightly away from her ear.

‘ Yes, Mother. How are you? ’ she said.

‘ I’ve been worried to death about you. Why haven’t you phoned? Are you all right? ’

‘ I tried to get you last night and night before. The phone here’s been— ’

‘ Are you all right, Muriel? ’

The girl increased the angle between the receiver and her ear. ‘ I’m fine. I’m hot. This is the hottest day they’ve had in Florida in— ’ (1-2)

「ミリュエル、あなたなの？」

彼女は受話器を少し耳から遠ざけて「そうよお母さん、元気？」と答えた。

「あなたの事が心配で死ぬ思いでしたよ。どうして電話しないの、大丈夫なの、あなた？」

「昨夜もその前も電話しようとしたけれど、ここの電話がー」

「あなた、大丈夫なのミリュエル？」

彼女は受話器をさらに耳から離して傾けながら「ええ、元気よ。暑いわ。フロリダでも一番暑いってー」

心配している母親は大丈夫なのかと繰り返し確認しているが、これに対して娘のミリュエルの返事は大丈夫だと答えてはいるが、天候の話をするなど、母親の心配を意に介していない。そして受話器は耳から遠ざけて話す、という母親の心配の熱意とは正反対の行動をとっている。なかなか繋がらなかった電話という交流の困難さもあるが、娘と母親の温度差が表現されていて、交流の不完全性が示されている。シーモアの交流の困難さと不完全性は、妻とその母親の会話にも暗示されている。

シーモアは実際に「陸軍が退院させたのが完全な犯罪行為」(“it was a perfect crime the Army released him from the hospital”)(3)と目される人物であり「シーモアは完全に自制心を失ってしまうかもしれない」(“Seymour may completely lose control of himself”)(3)と言われている人物である。戦争の傷から癒えていないシーモアは明らかであり、この結婚の危うさは予想できる。そしてシーモアは実際にミリュエルの祖母に向かってひどい事を言ってしまう、という行動をとっており交流の困難さは示されている。「鏡を見る」という名前の、他者に対して開かれず自己に完結してしまっているシーモアは明らかである。

交流の困難さを示しているシーモアであるが、作品中で海と一緒に遊ぶという唯一の交流を行っているのがシビルという少女で

ある。サリンジャーにとって子供は重要な意味を持つ。ジョイス・コールドウェル・スミス(Joyce Caldwell Smith)は「サリンジャーの小説の子供は、何人かの批評家が指摘しているように、大人よりもしばしば認識する力がある」(“Salinger’s fictional children are, as some critics have pointed out, often more perceptive than the adults”)(480)と述べているが、シビルというこの少女の名前は「巫女」(“sybil”)という予言者を表す単語が使われており、作品中でシーモアに関する何かを引き出す働きをしていると考えても見当違いではない。シーモアの隠れた何かを認識し、暗示する巫女の役割を果たしている。

海の中でバナナフィッシュが見えたか、と尋ねられたシビルは一度は一匹も見えないと答える。それに対してシーモアは、バナナフィッシュの説明をシビルにこのように話す。

‘ Well, they swim into a hole where there’s a lot of bananas. They’re very ordinary-looking fish when they swim in. But once they get in, they behave like pigs. Why, I’ve known some bananafish to swim into a banana hole and eat as many as seventy-eight bananas. ’ He edged the float and its passenger a foot closer to the horizon. ‘ Naturally, after that they’re so fat they can’t get out of the hole again. Can’t fit through the door. ’ (11)

「そう、バナナがたくさん入っている穴の中へ泳いでいくんだ。入る時はごく普通の顔をした魚なんだ。でも一度入ると、豚みたいに振る舞う。そうさ、私はバナナの穴の中に入って78本ものバナナを食べたバナナフィッシュを知っている」青年は浮袋とその乗客を沖に向けて1フィートほど押した。「当然そんな事をすると、太り過ぎて穴から二度と出られなくなるんだ。入口につかえて通れないんだ」

シーモアが説明するバナナフィッシュとは快樂に溺れて破滅する存在の事だと分かる。実際に穴から出られなくなったバナナフィッシュは死んでしまう、という説明を続けてシーモアはシビルにしている。快樂による破滅は容易に推測できるシーモアの話であるが⁶、同時にこれは非現実の話である事は重要である。バナナフィッシュなるものは実際には海中に存在しないのである。

しばらくシーモアとシビルは浮袋で一緒に遊ぶが、不意に水を被ったシビルはバナナフィッシュが今、一匹見えたとしてシーモアに告げる。非現実のものへの共感であり、快樂とその罰への共感と言っている。「シーモアにとってそれは喜びと恐怖の瞬間である」(“It is a moment of delight and horror for Seymour”)(118)とアーサー・F・キンネイ(Arthur F. Kinney)はこの瞬間がシーモアにとってシビルとの交流を断ち切る瞬間である、と言っている。もう、戻ろう、たくさんだろう、と言うシーモアに対して、たくさんじゃないと答えもつと遊ぶ事を頼むシビルであるが、シーモアはごめんね、と告げる。シビルは別れの挨拶をしてシビルから走り去っていく。快樂とその罰という非現実への共感は、交流の否定を促す。

シーモアはシビルと出会った時から、少女の足を掴むという行動を繰り返す。初めてシビルが登場して砂を蹴った時に足を掴む事から始まり、自分が枕にしていた浮袋を蹴るシビルの両足を掴む行為、水の上で浮袋で遊ぶシビルの足を掴む行為、そして別れる間にシビルの片足を掴みキスをする行為である。シビルと足の関連性は無視できない。足に対してのシーモアのある種の執着が明らかである⁷。

妻の待つホテルの一室へ向かい、ピストル自殺をするシーモアであるが、途中のエレベーターで出会う女性に「私の足を見ていますね」(“I see you're looking at my feet”)(12)と言いがかりをつけ、さらに「私の足をみたいなら、そう言いたまえ」(“If you

want to look at my feet, say so ”)(12)と続け、「私は 2 つのまともな足をしているんだ」(“ I have two normal feet ”)(12)とここでも足への執着を示している。シビルの足とシーモア自身の足の接点がここで浮かび上がる。作品中で初めてシビルが登場する際、母親に日焼け止めのオイルを塗ってもらっている際に、シビルが繰り返す「もっと鏡を見て」(“ See more glass ”)(6)、つまりシーモア・グラスとの接点も明らかである。快樂とその罰の話に共感を示したシビルの拒絶はしたが、ここでシビルに対して足という観点で一致をみる。バナナフィッシュという非現実への共感を示す者への拒絶と一致の希求という矛盾がここで明らかになる。彼のピストル自殺は、快樂とその罰という非現実に対しての拒絶と受容の矛盾の中で起こる事と言える。妻ミュリエルとその母親との電話の会話、シーモアの名前などに示される交流の困難さ、不可能性は、快樂とその罰という非現実に対しての拒絶と受容という矛盾の死につながる。

結 論

第 1 節では川端の「恐しい愛」と「百合」を取り上げ、愛は喪失という結果を生むと説明した。そして「恐しい愛」では父親が死に娘が残るという、死と生の分断と同時に、死んだ妻と一緒に考えていた娘のイメージが主人公の死により否定され、娘が死から生へと意味変化を経験する事により、死と生の分断を表すと説明した。そして「百合」でも自己の喪失の状態から神と同じになる事を望むことによって、主人公が人間性の否定、愛を注ぐ対象からの分断、そして人間社会からの分断を経験するというように、ここでも分断が表現されている事を説明した。第 2 節では「バナナフィッシュに最良の日」を取り上げ、主人公の交流の不可能性を説明し、小さい子供が示すバナナフィッシュという架空の快樂とその罰への共感に対して、拒絶しつつも、その子供の足と自分

の足を関連させて一致を望みながら自殺するという矛盾の死につながる事を示した。

川端の2つの短編もサリンジャーの短編も死を取り上げている事で共通であり、本稿の目的はその死の表象を比べてみる事であった。死という共通項の中に何か違いがあっただろうか。川端の「恐しい愛」と「百合」の短編は喪失の愛から分断を生じさせるわけであるが、ここでは両主人公の意志が主体となり、罰により命と自分を失うという、自己に由来する特徴がある。これがこの2つの短編で表現されている死の表象である。「バナナフィッシュに最良の日」では、自殺の契機が子供の示す共感であり、足という属性で一致を望むという意思の力はあるものの、この契機自体は起こった事であり、いわば受け身の状態から死につながるという他者に由来する死である。主人公シーモアが戦争の傷跡から回復しきっていない、という被害者の立場も受け身であり、戦争という他の事柄に由来するものである。つまり川端の2つの短編で描かれる死は、自己に由来するものであり、サリンジャーの短編で描かれる死は、他者に由来する死である。これが本稿の問である、死の表象を比べてみる、という事に対しての答である。自己由来と他者由来の差が明らかになったのではないだろうか。

ここでの川端康成とサリンジャーの比較は、おそらくは互いに影響を認めない作品の比較である。川端香男里は、ナボコフやヘミングウェイとの比較の可能性を示しつつ⁸、「欧米の研究者が複数外国語の視点、つまり比較文学的な視点に立って日本文学を評価し、理解しようとしている」(6)のであり、「日本の文学・芸術を測るには、外国とは別の基準があるという考えはもはや通用しない」(6)とはっきり述べている。作品の本質を比較する比較文学が、影響を比較する比較文学と共に、川端康成の様々な作品について当てはめられ研究される事を期待しつつ筆を置くことにする。

註

1. 以下、「恐しい愛」及び「百合」からの引用は、川端康成『掌の小説』、新潮文庫1989年の版に拠る。新潮社『川端康成全集』に拠るのが研究上の標準となっているのは承知しているが、入手のしやすさを考慮の上、文庫版を使用した。
2. 以下、「バナナフィッシュに最良の日」からの引用は、J. D. Salinger, *For Esmé—With Love and Squalor*, Penguin Books (2010)の版に拠る。
3. サリンジャー自身が第二次世界大戦後に精神を患い病院に入院しシルヴィア(Sylvia)という女医と結婚しており、作品中のシビルという少女が極めて似通った名前をしている事なども、サリンジャーの伝記的事実と重ねられるのではないか。
4. 「魚の臭い」とは通常、死んだ魚の臭いを連想させるものであり、この意味でも死んだ妻のイメージを強化している。
5. 三島由紀夫は『眠れる美女』について「活力が対象を愛するあまり滅ぼし殺すような愛であり、すべての人間的なるものの別名なのである」(215)と述べているが、この「百合」における愛する活力のベクトルは他者を滅ぼすのではなく、己を滅ぼす方向に向いていると言える。
6. 英単語“banana”には卑語として「ペニス」の意味があり、“have one’s banana peeled”という言い方、「自分のバナナを剥く」で「セックスをする」という意味になる。この観点からもこの快樂が性的なものを暗示させる。
7. キリスト教の文化圏では足は、天に近い頭と対極にあり、それゆえ天国に対して地上、現実感の意味を持つ。シビルの示す非現実への共感と彼女の足の現実感という二面性が、シーモアの矛盾の中での自殺と重なるようで興味深い。
8. 川端康成は国文科への転部の前に英文科に2年間在籍しており、英文学から何らかの影響を受けている事は否定できない。

参考文献

- 小原 早苗 「川端康成小論」、『日本文学』5巻、東京女子大学紀要、1955年、87－93頁。
- 川端 香男里 「世界の中の日本文学－川端文学の評価をめぐって」、中部国際大学紀要24号、2000年、19－24頁。
- 川端 康成 『掌の小説』、新潮社、1989年。
- 野口 祐子 「川端康成『古都』におけるすみれの花と時間感覚」、京都府立大学学術報告61巻、2009年、39－52頁。
- 三島 由紀夫 「解説」、『眠れる美女』、新潮社、1991年、213－6頁。
- 三田 英彬 「『抒情歌』と川端の世界観」、『学海』10巻、上田女子短期大学国語国文学学会、1994年、71－9頁。
- Kinney, Arthur F. . “ J. D. Salinger and the Search for Love. ” *Texas Studies in Literature and Language*, Vol.5 No.1(Spring 1963), <https://www.jstor.org/stable/40753630>, pp.111-26.
- Miller, Ian. “ The Mind and Stomach at War. ” *Medical History* (pre-2012)(Jan. 2010), pp.95-110.
- Salinger, J. D. . *For Esmé— With Love and Squalor*, Penguin Books, 2010.
- Smith, Joyce Caldwell. “ Language and the Maternal Function in Salinger's "Down at the Dinghy". ” *Texas Studies in Literature and Language*, Vol. 59, No. 4 (WINTER 2017), <https://www.jstor.org/stable/44866250>, pp.477-96.